

## 総括部分の記載内容(案)

### 第8章 総括

#### 第1節 日本の考古学・貝塚研究における加曽利貝塚の位置と意義

##### 1 考古学黎明期の重要遺跡

人類学・考古学の黎明期、貝塚は、人骨や珍しい遺物の収集を目的とした発掘の対象となり、千葉県に大規模な貝塚が多数存在することが知られていった。加曽利貝塚は、もともと大きな貝塚として、「本邦第一の貝塚」と讃えられた。

##### 2 近代的考古学の出発点

学術研究が急速に発展した大正末期、加曽利貝塚を舞台に日本考古学が大きな一歩を踏み出した。大正13年の山内清男、八幡一郎、甲野勇らによる発掘調査は、層位学的な調査法と、土器による編年学確立の端緒となるものであり、日本における近代考古学研究の出発点と評されている。

##### 3 関東地方の土器型式の標式遺跡

大正13年のB地点、D地点、E地点の発掘調査で意識された地点と層位による土器の違いをもとに、山内清男は関東地方の縄文土器の2つの型式を設定した。中期の加曽利E式土器は、北貝塚のE地点出土土器を基準として1937年に、後期の加曽利B式土器は、南貝塚のB地点出土土器を基準として1928年に、それぞれ設定されており、当遺跡の名前を学会に永遠に残すこととなった。

##### 4 大型貝塚のイメージ形成

昭和30年代後半にはじまった保存問題に対応する発掘調査は、大型貝塚の大まかな全体像を多くの研究者に知らしめた。北貝塚では、厚い貝層の下に遺構や埋葬などの生活痕跡があることが確認された。南貝塚の大発掘は、大型貝塚全体に縦横にトレンチを入れた空前絶後の調査であり、後・晩期主体の大規模貝層を伴う集落の姿や、中央に終焉期以外の遺物の少ない窪地が存在することが確認された。発掘にはきわめて多くの学生・研究者が関わっており、大型貝塚のイメージが共有されるに至った。保存・整備後は、小学校社会科教科書等に繰り返し掲載されたことにより、縄文集落のイメージを広く国民に知らしめる役割を果たした。

##### 5 研究成果に基づく遺跡保存と史跡整備

東傾斜面の発掘や、西外縁部の工事立会いによって、遺構群が北貝塚・南貝塚の範囲外に広がることが確認された。これを論拠とした「集落内貝塚説」が、広域保存を実現する際の説明根拠となった。発掘・研究の成果が、遺跡の保存の根拠となり、整備・活用に影響を与えたことも加曽利貝塚の歴史の特質すべき点である。

## 第2節 文化財保護・活用の歴史上の加曽利貝塚の位置

### 1 保存運動の意義と与えた影響

#### (1) 埋蔵文化財保護の基準や考え方を明示したこと

加曽利貝塚は、国会の場で埋蔵文化財保護問題が取り上げられた当初、はじめて本格的な議論が行われた遺跡といえる。一部記録保存の方針に対して繰り返し具体的な質疑が行われた。国民の代表と、埋蔵文化財の責任者の間で詳細な議論が交わされ、未指定の遺跡をどのように保護するか、基準や考え方が判断され、議事録として残された。その意義は、以下の2点が確認され、実際にそれによって保存が実現したことにある。

①記録保存の方針であっても、調査の結果によっては保存の検討を行うことがあること

②埋蔵文化財の保存の判断には、学術的な調査と専門家の意見が重要となること

#### (2) 遺跡と里山景観の保護に多くの市民が関わってきたこと

保存運動は、千葉市民から始まり、全国の考古学研究者を巻き込んだ保存運動が市を動かし、国を動かして、ついに保存が実現した。開発が何より優先される情勢のなか、広域の保存が実現したことは奇跡的といえる。周辺の宅地開発が進むなか、遺跡周辺の台地、斜面地、沖積低地という陸環境と、湧水池、湿地、河川という水環境が良く残され、多様な生態系を育んでいる。こうした里山景観は、縄文集落の借景として機能し、史跡の来訪者が当時の生活に思いを馳せるのに役立っている。市民が積極的に文化遺産や周辺の環境を守るかたちで街づくりに参加した記念碑的な場所である。

#### (3) 考古学と埋蔵文化財行政を担った多くの研究者が関わったこと

これまでに、日本考古学協会に設置された23の特別委員会のうち、単独遺跡の発掘調査に関わるものは3件のみであり、協会が調査団を組織したのは三殿台遺跡と加曽利貝塚の2遺跡のみである。加曽利貝塚の発掘に参加した学生・研究者、保存運動に参加・賛同した多くの関係者は、その後、全国の埋蔵文化財の保護・活用、考古学研究をリードしていった。加曽利貝塚の保存運動と発掘調査は、間接的に大きな影響をもたらしたと考えられる。

### 2 文化財の活用に与えた影響

#### (1) 加曽利貝塚博物館の活動

加曽利貝塚博物館は、当時最新の貝塚・集落研究に裏付けされた展示を行うとともに、貝層・遺構の野外展示、市民による縄文土器の復元製作等先駆的な試みを実践し、全国に影響を与えた。

#### (2) 学校教育における実践

千葉県内では、加曽利貝塚を素材とした社会科授業が数多く実践され、歴史教育や地域教育の素材として魅力をもつことが示された。

### 第3節 東京湾東岸の貝塚群と加曾利貝塚

#### 1 大型貝塚群の現状と蓄積された資料・情報

- ・東京湾東岸の大型貝塚は、大規模な貝層とともに、多数の竪穴住居跡や埋葬遺体を包含している。したがって、歴史の主人公たる縄文人とその生活、多くの人口と長期に渡る安定的な生活を支えた生産基盤を併せて考究できることが、大きな利点である。
- ・東京湾東岸地域は、大型貝塚がもっとも集中するだけでなく、発掘事例が多く、厩大な出土資料や情報が得られていることも特徴である。昭和50年代後半以降、京葉地域ではニュータウン造成に伴って実施された大型貝塚の全体像を知り得る発掘調査が相次いで行われた。8つの調査事例は、全国的に見ても他にない貝塚の大発掘であり、しかも、周囲の広域が面的に調査されたことから、遺跡群単位の通時的な分析が可能である。当時の社会・経済についても総合的に研究することができる。
- ・近年は、動物考古学の進展や、人骨の同位体分析による食性の復元、DNA分析による集団・社会の解明など、貝塚出土資料から得られる情報量は格段に増えている。さらに、下総台地上に立地する集落縁辺の谷には、縄文時代の地層がよく保存されており、古環境と資源利用を併せて検討できる点も特筆される。

#### 2 大型貝塚群における加曾利貝塚の位置づけ

以下の諸点から、加曾利貝塚は、東京湾東岸の貝塚群を代表し、大型貝塚を象徴する存在といえる。

- ・東京湾東岸の貝塚群中最大の貝層規模をもち、代表的な貝塚のなかではもっとも保存状態も良好で、旧来の地形をほぼ留めている。
- ・中期大形貝塚と後期大形貝塚が接触して存在する唯一の事例であり、中期段階から貝層を堤状に盛り上げる稀有な例でもある。
- ・大型貝塚群の形成～消滅～再形成～消滅という、大きな社会の変革期を乗り越えて約2000年にわたる居住が認められ、その間の生産・居住様式の変化を分析しうる。1遺跡でこれだけの資料を得ることができる点で、唯一の存在と言える。
- ・大型貝塚の全容を知り得る発掘例のうち、中期を代表するのは千葉市有吉北貝塚、後期を代表するのは市原市西広貝塚であるが、北貝塚・南貝塚の貝層は、二つの貝塚の貝層を合わせたよりもはるかに大きい。また、遺構内貝層もきわめて多い。したがって、時期を判断できることによって、比較分析に耐えうる貝層がきわめて多く保存されている。
- ・東京湾東岸の大型貝塚のなかで、開発に伴う工事が主要部に及んでいない稀有な事例である。貝層の保存状態が良いため、動物遺体、骨角歯貝製品、炭化種子、赤彩土器等の保存状態も良好である。
- ・埋葬人骨がきわめて多い。日本の人類学研究をリードしてきた東京大学の人骨コレクションのなかで重要な位置を占めている。

## 第4節 日本列島の貝塚と加曽利貝塚

### 1 日本の伝統的な文化に対する関心の高まりと貝塚

“和食－日本人の伝統的な食文化－”が無形文化遺産に登録され、日本食の魅力が改めて見直されているが、そのルーツがどこにあり、どのように醸成されてきたかは全く解明されていない。農林水産省が挙げる和食の特質のうち、①多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重、②栄養バランスに優れた健康的な食生活、という根幹部分は、貝塚研究から明らかにされた縄文時代の食文化のイメージに合致する。縄文人の食文化が、現代に受け継がれているか否かは、今後の検証が必要だが、列島各地の縄文人が、数多の食材を見出し、獲得・加工・保存の技術を研ぎ、利用可能な食材を組み合わせ、計画的に生産・消費するシステムを作り上げたことは明らかであり、高く評価されるべきであろう。

縄文時代の貝塚は、それを現代・未来に伝える一番の証拠である。数千年前の食を具体的に語るができる資料が、これだけ揃っている地域は、世界を見回しても他に存在しないであろう。食文化だけではなく、生産活動や自然との関わりなど、未だ不明な点の多い日本の伝統的な文化のルーツや醸成の過程について、貝塚研究から語り得るものは多い。こうした点から、貝塚は、日本の歴史を語る上で欠くことのできないものであり、日本の伝統的な文化を象徴する存在といえる。

### 2 東京湾東岸の貝塚の重要性

縄文時代の史跡 175 件のうち、貝塚が 62 件と3割以上を占めることも、貝塚の重要性を物語る。千葉県内の縄文時代の史跡は 12 件あり、そのうち 11 件が貝塚であるが、それに匹敵する未指定の貝塚が数多く存在することは、他の追従を許さない。千葉市だけでも 20 か所の大型貝塚が存在するのである。史跡クラスといえる貝塚が数多く存在することが、千葉市あるいは千葉県のもっとも大きな魅力である。

山内清男の「縄文時代の生業の圧倒的な証拠は貝塚に残る獣骨、貝殻等であって、これらは狩猟、漁撈、採集の証拠である」という文章は、貝塚の本質的な重要性を簡潔に表現したものとして知られている。近年、低地遺跡における植物質食材の分析研究が大きな成果を得ているものの、資源利用の研究の高まりによって、縄文貝塚の存在意義はさらに増したと考えられる。

全国の貝塚のうち、圧倒的な数を誇り、集積された情報、遺跡に残された情報とも、圧倒的な存在といえる千葉県あるいは東京湾東岸の貝塚群は、特別に重要な遺跡群といえるであろう。

### 3 加曽利貝塚の枢要の価値

以上のように、加曽利貝塚は、千葉県あるいは東京湾東岸の貝塚群を象徴する存在であり、史跡に指定された貝塚のなかでも、多くの点で飛びぬけた存在であることから、史跡のうち学術上の価値が特に高いといえるであろう。また、多様で新鮮な食材の利用に代表される日本の伝統的な食文化を象徴する縄文貝塚の代表として、我が国の文化を象徴し得る存在といえることができよう。

## 第5節 加曽利貝塚のもつ今日的意義と今後の活用

全国の発掘成果によって、縄文時代観や遺跡のもつ力に対する見方は大きく変わりつつある。東京湾東岸の貝塚群は、すでに膨大な分析・研究成果の蓄積がある。さらに、毎年のように貝塚の発掘が行われており、新たな縄文時代像を描き得るだけの資料と情報をもっていると考えられる。しかし、余りにも膨大なだけに、分析や研究は追いつかず、成果は充分活かされていないのが実情である。分析や研究を行う人材は決定的に不足している。危機的な状況を乗り越え、この大切な資産を活用していくには、どうしても研究や活用の拠点が必要であり、それは加曽利貝塚以外には考えにくい。

加曽利貝塚は、前節までに述べたような輝かしい歴史をもつ一方で、新たな展開がないまま、貝塚や縄文研究の動向から取り残されている。このような状況に至った原因は、理想像を検討する委員会と、現実的な対応に迫られる行政、改善を求める市民、関係が乏しいままの研究者の間を繋ぐ部分が手薄だったことを第一に挙げることができる。どれだけ学術的価値が高い遺跡でも、それだけでは古びていくということを、加曽利貝塚の歴史は教えてくれる。このような状況にあっても、長い間支援を送り、活動を支え続けてくれた市民、現在の考古学研究や学際的研究を支えている多くの研究者とともに、研究と活動の拠点づくりを進めて、この大切な資産を活かしていきたい。